

# アドベンチャースに生きる!

田中正人

Masato Tanaka

田中陽希

Yuki Tanaka



## はじめに

この本は、アドベンチャーレースに人生をかけてきた二人の男の物語だ。多くの人にとって「アドベンチャーレース」は聞き馴染みのないスポーツだろう。しかし、そこで練り広げられる人間模様は、決して別世界の物語とは言いきれない。「人はどうしたら成長できるか」「人は人とどう関わればいいのか」といったスポーツの枠を超えた普遍的なテーマが流れている。

アドベンチャーレースは山岳地帯やジャングル、海、川、氷河や砂漠、洞窟といった大自然を舞台に練り広げられる。国際的なレースでは、欧米やオセアニアからの出場チームが目立つなか、日本では田中正人率いる〈チームイーストウインド〉がもつとも長く挑戦し続けている。

スタートからゴールまでの総距離は数百キロ、途中にあるチェックポイントを通過しながら、三日から一週間ほどかけてゴールを目指す。チームは男女混成の四人一組が基本であり、メンバーはレース中、片時も離れることができない。選手たちは、大会主催者から与えられた地図を見ながら、効率のよいルートを選び出し、コンパスを頼りにトレッキングやマウンテンバイク、シーカヤック、ロープワークなど、セクシヨンごとに決められた

方法で進んで行く。

衣食住を詰めた重いザックを背負いながら、灼熱の中を歩き、時に豪雨に打たれ、氷点下の寒さに凍えそうになる。全身を容赦なく襲ってくる蚊やヒルに悩まされたり、ジャガイロがひそむ密林を通過したり、ワニやピラニアが生息する川を渡ったりする。選手たちは知力、体力、精神力、判断力などを総動員して、極度の眠気や疲労と戦いながら前へと進む。

特徴的なのはレース中、メンバー同士が助け合ってよいことだ。たとえば、走るのが遅いメンバーがいれば余裕のあるメンバーが代わりに荷物を背負い、上り坂でマウンテンバイクが遅れたメンバーがいればロープを使って牽引する。選手一人ひとりの体力やスキルは不可欠だが、さらに重要となるのは「チームワーク」だ。

こうした極限の世界で、イーストウインドは20年以上にわたり活動を続けてきた。1967年生まれの田中正人は、化学者として八年間勤務していた化学会社を辞め、1996年にイーストウインドを設立する。と同時に、日本人初の「プロ・アドベンチャーレーサー」となる。利根川が流れる群馬県みなかみ町に拠点を置き、志を同じくする仲間たちとトレーニングに励んだ。生活は苦しかったが、「世界に挑戦する」という信念だけは決して揺る

がなかった。

しかし、現実には厳しい。アドベンチャーレースを続けるためには、生活費以外にも装備や渡航費など膨大な費用が必要となる。レースを中心とした生活は不安定で、人生設計も立てにくい。アスリートとしての自らの生き方を見つめ直したり、チームスポーツとは別の世界に移行したりと、メンバーは頻繁に入れ替わった。それでも田中正人は、イーストウインドとして世界へ挑戦することを諦めなかった。

2007年、ここに田中陽希が加わる。明治大学のクロスカントリースキースキー部で主将を務めた後、体育教員になるために日本体育大学で学んでいたとき、アドベンチャーレースの存在を知った。「自分のやりたいことはこれだ」という直感と強い決意で、イーストウインドの門を叩く。

二人に共通しているのは、「アドベンチャーレースで世界一になる」と本気で考えていることだ。次期キャプテンといわれる陽希は、2014年から2015年の二年間、一人で『日本百名山ひと筆書き』『日本2百名山ひと筆書き』に挑戦し、見事に成し遂げた。ドキュメンタリーのテレビ番組を通して、その強靱な肉体と粘り強い精神力に驚かれた人もいるだろう。陽希は言う。「この挑戦を決めたのは、アドベンチャーレーサーとしてもっと強くなりたかったからだ」と。

一方で、正人はこう話す。「人として自分に何が足りないか。それを教えてくれるのがアドベンチャーレースだ」と。過酷な状況下で、選手たちは心身ともに追い込まれ、仲間を思いやる余裕すらなくなる。そこでは「素」の姿が露呈してしまう。自らの弱さに直面し、それを乗り越え、みなで同じ到達点を目指したところに「勝利」がある。

アドベンチャーレースは「人間の社会そのもの」といわれている。私たちは人に支えられ、人と関わることでしか生きることができない。会社や仲間、家族……人の集合体はさまざまだが、大切なことは、もしかしたら一つなのかもしれない。

この本を手にとってくださった方々が、二人の物語を通して、その小さな手がかりに出会えることを願っている。

なお本書では、両氏による著述のほか、田中正人夫人の手記、これまでイーストウインドに所属したメンバー、現在のメンバーへのインタビューも併載した。彼ら彼女らの言葉に触れ、想いを照らし出すうち、二人の物語がより立体的に浮かび上がってくるのを感じた。貴重なお時間を割いてくださった皆さまに、この場を借りて心より御礼申し上げます。

千葉弓子（本書構成）

11 第一章 田中陽希 アドベンチャーレーサーとしての僕の道

白銀の世界から飛び込んだアドベンチャーレース 12  
 あの頃、誰かのせいにしていた弱い自分 20  
 もっと強くなりたい！世界の果てから、日本百名山の旅へ 32  
 非日常が日常化していく、日本二百名山への挑戦 47  
 人との出会いが教えてくれた大切なこと 63  
 イーストウインド、次期リーダーとしての決意 82

91 第二章 田中正人 人生すべてをアドベンチャーレースに捧げて

研究者からプロ・アドベンチャーレーサーへの転身 92  
 極貧時代を共に過ごした仲間たち 107  
 「ハンの耳では子どもは育たんぞー」 112  
 衝撃が走ったメンバーからの一言 117  
 世界で勝つため、真のリーダーを目指す 120  
 レースは予想外の出来事の連続 128  
 僕らを支えてくれる人たち 132  
 「弱い人を引き上げる」チームワークの方程式 138  
 陽希の弱さと強さ 144

153 第三章 仲間たちが語る 自分にとってのイーストウインド

イーストウインド参戦レース一覧 154  
 〈インタビュー〉  
 白石康次郎 イーストウインドは僕の青春だった 156  
 白戸太朗 本音でぶつかりあった仲間 162  
 石川弘樹 田中正人から学んだ競技者としての姿勢 170  
 平賀淳 生きるべき道が見えた場所 178  
 駒井研二 アスリートカムで活きるレース経験 184  
 佐藤佳幸 言葉がなくても、わかり合える瞬間がある 188  
 和木香織利 大きな確執を乗り越え最高のチームが生まれた 194  
 西井万智子 見たことのない世界で知らない自分と出会う 200  
 〈手記〉  
 竹内靖恵 妻から見たイーストウインド 206

225 第四章 田中陽希 現在地を知り、未来の道をつくる

山北が離れ、新たなチーム編成に 226  
 『2016年オーストラリア世界選手権』への始動 229  
 課題のひとつはバドリング 233  
 レース中の「睡眠」をどうとらえるか 236  
 イーストウインドのこれから 240

## 第一章

# 田中陽希

## アドベンチャーレーサーとしての僕の道

## 白銀の世界から飛び込んだアドベンチャーレース

1983年6月5日、田中家の長男として埼玉熊谷市で生まれた。2300gほどの未熟児だった僕は、すぐに保育器の中へ閉じ込められてしまったそうだ。

保育器の中で一週間ほど生きる僕の姿を見た父は、僕に「ようき」と名づけた。小さいながらも一生懸命に生きる姿を見ているうちに、「容器の中で一生懸命に生きているから『ようき』と決めた」という。漢字は後から当てたらしい。「太陽のように大きな希望を持って生きてほしい」という願いを込め、僕の名は「田中陽希」となった。

父と母は結婚してから丸三年かけて、日本中を旅した。ホンダ車に乗って全国を駆け巡る中で見つけたのが、北海道富良野市麓郷という土地だった。

ちょうどテレビでは、東京から富良野へと移り住んだ家族ドラマ『北の国から』が放送されていた。その番組にも影響を受けたらしいが、「子どもを育てるなら、大自然あふれる場所で暮らしたい」という夢が父にはあった。

そして、子どもが三人生まれたタイミングで北海道へ移住した。自宅はログハウス、『北の国』からを地で行く感じだ。驚くことに、我が家に使われている木材はログハウスの本場、カナダから輸入したものだ。これは、僕が30歳になった時に知ったことだ。そこで父が考えてこの家を建てたことに驚いた。

親族も友人も知人すらいない土地での生活は、母と6歳の僕、3歳の妹、1歳の弟の4人で、夏休みが終わる8月末ごろからスタートした。父はひとり埼玉県に残り、二年間の単身赴任となった。母の不安は計り知れないものだったろう。見知らぬ土地での新生活、弟は赤ちゃんのため、働くこともできない。そして、初めての北海道の冬。暖房のメインは薪ストーブ。母にその頃のことを聞くと、「とにかく必死だった」と笑いながら話す。

半年が過ぎ、僕が小学校に入学する4月、単身赴任中の父に代わり、愛知県から母方の祖父が一年間、一緒に生活をしてくれることになった。これは、僕ら家族にとってはかなりの助けとなった。

僕たち家族が移住した麓郷は、富良野市内中心部から15kmほど離れた山の中腹に位置している。十勝連峰に抱かれた丘のような緩やかな土地には、先人たちが開墾して広げた農地が360度に広がっていた。

今から25年ほど前は『北の国から』の人氣も手伝って、夏になると道内外から多くの観光客が訪れた。雪で閉ざされる冬場は、麓郷地区を挙げてのクロスカントリースキー大会も毎年開催されていた。

兄弟三人が通った麓郷小学校では、冬になると真っ白い校庭に出て、一年生からクロスカントリースキーに励んだ。

全校生徒が参加するクロスカントリースキー少年団は、先生よりも親御さんたちのほう

が熱心だった。自分の両親も例外ではなく、とくに単身赴任を終えて北海道に帰ってきた父は、誰よりも熱心だった。野球マンガの星一徹のような感じだった。

冬は日が暮れるのが早く、4時を過ぎると校庭にはライトがともり、一気に冷え込む。白い息を吐きながら、たくさんの子どもたちが競うように校庭を颯爽と滑り抜けた。クロスカントリースキーやスケートに力を入れている北海道の学校ではよく見られる光景だ。

もちろん、はじめからうまく滑れたわけではないが、3歳から父にスキー場に連れて行かれた僕は、雪に対する抵抗はなく、むしろ好きだった。友達と競うように、滑り方を覚えていった。そして、市内の大会や地区の大会などで、入賞や優勝を繰り返し、いつしかクロスカントリースキーの魅力に引き込まれていく。

兄弟が三人とも中学校卒業までクロスカントリースキーを続けていたが、妹は卒業と同時に引退し、僕と弟は高校・大学卒業まで続けた。僕らはそれぞれ、当時クロスカントリースキーで国内トップクラスだった強豪校へ入学した。僕は旭川市にある旭川大学高等学校に入り、親元を離れての下宿生活が始まった。

小中高と目立った成績を残せなかった僕は、憧れだったインターハイなどの全国大会には出場できなかったが、それでもクロスカントリースキーへの情熱は失せることはなく、大学行っても続ける決心をしていた。そして、高校の恩師のおかげで、明治大学へ進学するチャンスを得た。

両親に「明治大学に行くチャンスがある」と伝えたところ、「絶対に行きなさい！」とすぐに返ってきた。もしクロスカントリースキーを続けていなかったら、自分はこの歴史ある大学に入学することもなかっただろう。クロスカントリースキーだけを小中高と一心不乱に続けてきた僕にとっては予想もしていなかった進学先で、当時はかなり舞い上がっていたと思う。

明治大学といえば「伝統」というイメージで、僕が入部した体育会スキー部も同様だった。創部以来、インターカレッジ（全日本学生スキー選手権大会）で1部から2部に落ちたことがない、唯一の大学だ。

そのため、大学まで競技を続けてきて入学する学生は、先輩やOBなどの大学側からは即戦力と考えられている。しかし、僕はインターハイでの入賞どころか、出場経験もない。大学で結果を残せるかどうかは自分自身にかかっていた。

いきなりド田舎から上京した僕にとって、大都会での生活は闘いだ。想像以上に厳しい合宿所生活、トレーニングを終えた後の夜間の授業、人、人、人であふれかえる街、見るものすべてに翻弄されていた気がする。

それでも必死に食らいついた。応援してくれる両親、活躍を期待してくれる人たちのため、そして、自分自身を裏切らないために。

四年間もがき苦しみ、葛藤を繰り返したが、決してあきらめはしなかった。というより

もあきらめられなかった。その結果、大学四年生のとき、インターカレッジで初めて入賞することができた。

中学校の卒業式で「夢はオリンピックに出場することです」と語ったが、それから七年を重ねるごとに、その夢は遠くへ遠くへと離れていた。強豪高校に進学し、全国レベルの選手たちの中で競技に向き合ううち、どこかで自分の可能性を見切りをつけていたのだろう。「オリンピック出場」の夢がいつしか、「競技を引退するまでに全国大会で入賞する」に変わっていたわけだ。

自分の中ではインターカレッジの入賞で、16年間の競技人生に終止符を打ち、次へ向かうためのステップを探ろうとしていた。卒業後の人生に目を向け、教師となって、自分が追い続けたかった夢を教え子に託そうという思いが生まれていた。

しかし一方では、まだ22歳の自分がこんなに早くアスリートとしての幕を下ろしていいものだろうか、競技を変えればチャンスはあるのではないか、という気持ちもあった。

何に挑戦すればいいのか……クロスカントリースキーのように、魅力のある競技はないものだろうか？

悩み、考えたが見つけることはできず、明治大学を卒業後、もう一つの選択肢だった体育教員になる道を選び、日本体育大学に教職課程生として進学した。学内には、同じような志を持って、他大学から入学した学生も多かった。

同じような道を歩んできた友人もできた。しかし、時間を共有する中で、自分の熱と友人たちの熱に少し差があることを感じ始めていた。

一方で、全国から猛者たちが集まる体育大学では、現役アスリートと授業を共にする機会もあり、彼らに多いに触発された。

そんなこともあって、まず体力維持のためにジムに通おうと考えた。次に、かつてトレーニングとして通っていた高尾山や富士山に走りに行くことも再開した。山を走るうち、次第にレースに出場してみようというチャレンジ精神が芽生えた。

山岳マラソンに挑戦してみようと思った。当時、日本一の山岳耐久レースとして注目を集めていた『日本山岳耐久レース（ハセツネカップ）』への出場を決断。エントリーするために大会ホームページを開いたところ、歴代優勝者が紹介されていた。

山の中の約72kmをノンストップで駆け抜けるこのレース、優勝者はどのくらいでゴールしてしまうのだろうか？ 興味のままにページを眺めた。すると、男子は9時間ほどでゴールしてしまうことがわかり驚いた。

そこには、初代優勝者の田中正人の名があり、同じ苗字になにやら親近感が湧いた。ほかの優勝者にはないリンクがその人には貼られていて、どんな人が優勝するのだろうかという興味から、ホームページを閲覧してみた。すると、目に飛び込んできたのは「アドベンチャーレース」という文字だった！

## 第二章

# 田中正人

人生すべてをアドベンチャーレースに捧げて

## 研究者からプロ・アドベンチャーレーサーへの転身

1996年から、僕は群馬県みなかみ町（旧・水上町）でイーストウインドの活動を続けてきた。まずは、いまの生活について書こうと思う。

普段、メンバーはそれぞれ個別にトレーニングを行っている。僕の場合は家の近所でランニングをしたり、自転車に乗ったりすることがメインだ。

平日は長女・徳（あきら）の通学ランに付き合う。自宅から学校を経由してノルン水上スキー場までを往復すると距離で18kmくらい、登りの標高を足していく累積標高では600mになる。みなかみ町は平らなところがほとんどないので、ロードランでもいいトレーニングになるのだ。

夕方、時間が空いたときには、イーストウインドの活動拠点であり、ラフティングなどのツアーイベントを手がける〈カップクラブ〉に出かけ、自転車のローラー台やカヤックのパドルを動かすエルゴマシンでトレーニングをする。

理想としては、それぞれの種目を1時間ずつ、一日に3〜4時間くらいトレーニングできるといいのだが、実際にはなかなか難しい。近年、ドキュメンタリー番組の撮影スタッフとしてランニングカメラマンの仕事をしていることもあり、長期間、海外に滞在する機

会も増えた。自宅にいないことが多くなり、思うようにトレーニング時間が確保できないのがいまの悩みだ。

大会の一〜二カ月前になり、トレーニングが進んで体ができてきたら、10〜20kgのザックを背負ってランニングを行う。いきなり高負荷のトレーニングをするのではなく、徐々にステップを踏みながら負荷を高めていくわけだ。基本的には、スピードよりもパワーと持久力向上を意識している。

少し時代をさかのぼって、アドベンチャーレースに出会う前のことを振り返ろう。

埼玉県志木市に生まれ育った僕は、子どものころは自己主張が強く協調性というものはほとんどなかった。意見が対立すれば相手をやり込めるまで徹底的に論破した。当然殴り合いのケンカに発展することも多かった。敵をつくることにまったく抵抗感はなく、孤立無援になっても平気なタイプだった。

当然、団体競技には向いておらず、体育のバスケットボールなどもすぐケンカ状態になるありさま。このような状況だったので、将来の仕事についても接客や営業などは絶対にやらない（できない）と子どもながらに考えていた。

もともと理科が好きで、とくに化学には心が躍るほど興味があつた。中学校で化学反応式を学ぶようになると、ますます化学好きが高じ、進学は普通高校ではなく高等専門学校

を選んだ。高専では、普通高校で学ぶ化学を一年生の半年ほどで終わらせ、実験と実習とレポートの日々が続いた。仮説を立て、実験をして、結果を検証する。この繰り返しによって、課題解決の方法論を徹底的に叩き込まれた。

他人の感情に配慮できない自分にとっては、論理的に物事を解決する手法は非常に小気味よく感じた。ちょうどこのころ、競技オリエンテリングにも出合い、どんどんハマっていった。

卒業後は有機合成化学の会社に就職する。社会人になってからも〈多摩オリエンテリングクラブ〉という地域クラブに所属して競技を続け、毎週末、高尾や奥多摩の山々を走り回っていた。

オリエンテリングという競技がどういうものか知らない方もいると思うので、少し説明しよう。

競技用に特別につくられた地図とコンパスのみを使って大自然の中を駆け回り、チェックポイント（コントロールと呼ぶ）を順番にたどりながら、可能なかぎり短時間で走破する。地図から地形を瞬時に読み取る技術と、どのルートを選んで進むかというルートチョイスが鍵を握っていて、その決めたルートを迷わずタイムロスなく進むことを目的とする究極のナビゲーションスポーツだ。日本では70年代にレクリエーションとして広まったため、競技スポーツとして認知されにくいのが、高校の部活や大学のサークルとして行ってい

るところもあり、90年代初頭はいまよりも各地で盛んに競技大会が開催されていた。

多摩オリエンテリングクラブは国内でも老舗の地域クラブであり、競技志向が強かった。そのため、僕も日常的にランニングをするようになり、週末は先輩たちの背中をひたすら追いつながらトレイルランニング（当時はマラニックと呼んだ）をした。

先輩たちは非常に厳しくて、オリエンテリング界で鬼軍曹と恐れられている人もいた。私は負の感情をエネルギーに変えるタイプなので、誰かに褒められても気持ち悪いと感じるか、何かを企んでいるに違いない、といった不信感しか生まれえない。山の登りでついでいけない僕に、鬼軍曹は「ゴミっ！」「糞だな！」といった厳しい言葉を投げたが、その言葉に奮起して、僕はますますくらくらいついていった。鬼軍曹とは週二回、平日の夜も都内でスピードトレーニングを行った。こうして僕は一番弟子となり、さまざまな登山競走で成績を残せるまでになっていた。

オリエンテリングに明け暮れていた僕に転機が訪れたのは、1993年のことだ。

第一回『日本山岳耐久レース（ハセツネカップ）』に出場し、優勝を果たしたのだ。71・5kmを24時間の制限時間内で走破する、通称「ハセツネ」は、夜間も行動するというそれまでにない競技として注目された。ソロクライマーとして、ヨーロッパアルプス三大北壁冬季単独初登攀や南米アコンカグア南壁冬季単独初登攀など、数々の記録を樹立した

歴史的なクライマー・長谷川恒男氏の業績を讃えて設立された大会だ。

1948年から開催されている『富士登山競走』など駆け登り一辺倒だった従来の登山競走とは一線を画した新しいスタイルの山岳レースとして、胸がときめいたのをよく覚えている。奥多摩は日頃のトレーニング場所でもあり、僕にとっては庭みたいなところだったので、練習の延長線上のような感覚だった。実力がいちばん伸びている時期だったこともあり、運良く優勝することができた。

この優勝がスポーツ紙に掲載され、あるイベントプロデューサーの目に留まる。そのプロデューサーは、当時、世界最大のアドベンチャーレースだった『レイド・ゴロワーズ』にタレントの間寛平さんをリーダーとするチームを送り込み、日本人初完走のタイトルを取ろうという企画を考えていた。その人が「一緒にやらないか」と声をかけてくれたのが、僕とアドベンチャーレースとの出会いだ。

「ハセツネカップに優勝し、オリエンテERING選手でもあることは、アドベンチャーレースの選手としてこいだ」と説明を受ける。冒険レース……なんとも好奇心を煽られる言葉だった。僕は二つ返事で承諾した。

しかし内心、チーム競技であることに不満を持ってもいた。「チームで戦うのでは、自分の好きなようにレースができないじゃないか」。それでも未知の世界に足を踏み入れることに胸が高鳴った。

僕はそのころ、化学会社で有機ゴム薬品をつくっていた。ゴムは製造段階で混ざる薬品によって、柔軟性や耐久性などの特性に変化が生まれる。普通の化学会社では扱うのを避けるような劇薬物も多く扱っていた。研究内容によっては、さらに毒性の強い化合物を扱うこともあり、化学物質過敏症になって退職を余儀なくされる同僚が出るなど、常に緊張を強いられる環境だった。

大きな会社ではなかったので、研究室におけるフラスコでの実験から、工場での実用化試験まで担当できることもあり、とてもやり甲斐のある職場で気に入っていた。大手メーカーとの共同開発でサンプル化合物を合成する仕事では、一年間で100種類近い新規薬誘導体をつくった。工場生産へのステップは、青酸ソーダを何キロも扱う危険を伴う作業で、アドレナリンが出るようなシーンが何度もあった。防毒マスクを装着し、作業中は毎日、焼却処分した。

社内では毎月、消防訓練を実施していた。それも形式的な行事ではなく、真剣そのものだ。敷地内にある複数の工場と研究所には、それぞれ自衛消防隊が設置されている。どこで火災が発生したか知らされぬままに訓練が始まり、自衛消防隊が急いで出動していく。ホースを延長している最中から放水バルブを開いていくので、一瞬の間合いでホースがつながらないと水が飛び出してしまう。とにかく一刻を争うので、毎回反省会も行った。と

## 第三章

# 仲間たちが語る

自分にとってのイーストウインド

## チームイーストウインド参戦レース 一覧

開催年	大会名	開催地	リザルト	選手	アシスタント
1996年	エコ・チャレンジ	カナダ	ランク外	田中正人、鈴木篤、白石康次郎、菅原琢、北村留美	田島健司、児玉ゆき
	サザン・トラバース	ニュージーランド	3人クラス13位 (日本人チーム初完走)	鈴木篤、村田文祥 (服部文祥)、生田洋介	田中正人
1997年	レイド・ゴロワーズ	南アフリカ	11位	田中正人、白石康次郎、鈴木篤、田島健司、北村留美	新保政春、竹内靖恵
	エコ・チャレンジ	オーストラリア	リタイア (特別賞受賞)	田中正人、鈴木篤、倉田和輝、羽山菜穂子	
	サザン・トラバース	ニュージーランド	3人クラス4位	田中正人、鈴木篤、倉田和輝	
	マイルドセブン・アウトドア・クエスト	中国四川省	11位	田中正人、駒井研二、新保政春、杉山美佐	
1998年	レイド・ゴロワーズ	エクアドル	ランク外24位	田中正人、横山峰弘、駒井研二、平賀淳、マリア(地元選手)	新保政春、中目智子
	サザン・トラバース	ニュージーランド	5人クラス4位	田中正人、横山峰弘、駒井研二、平賀淳、宮内佐季子	田島健司、新保政春
	マイルドセブン・アウトドア・クエスト	中国雲南省	9位	田中正人、駒井研二、平賀淳、宮内佐季子	
1999年	エコ・チャレンジ	アルゼンチン	15位 (日本人チーム初完走)	田中正人、田島健司、高畑将之、宮内佐季子	
	マイルドセブン・アウトドア・クエスト	中国雲南省	11位	田中正人、白戸太郎、田島健司、宮内佐季子	
	クロスアドベンチャー	フランス	36位	田中正人、白戸太郎、田島健司、宮内佐季子	
	クロスアドベンチャー	ドイツ	12位	田中正人、白戸太郎、田島健司、宮内佐季子	
	クロスアドベンチャー	長野県	6位 (国内1位)	田中正人、白戸太郎、高畑将之、宮内佐季子	
	クロスアドベンチャー	モロッコ	21位	田中正人、白戸太郎、石川弘樹、宮内佐季子	
2000年	レイド・ゴロワーズ	ヒマラヤ	14位	田中正人、白戸太郎、高畑将之、石川弘樹、宮内佐季子	
	エコ・チャレンジ	マレーシア	13位	田中正人、高畑将之、石川弘樹、宮内佐季子	佐藤佳幸、遠藤大哉
	マイルドセブン・アウトドア・クエスト	中国雲南省	13位	田中正人、白戸太郎、佐藤佳幸、坂根美佳	
	クロスアドベンチャー	岐阜県	3位 (国内1位)	田中正人、高畑将之、石川弘樹、宮内佐季子	
	クロスアドベンチャー	フランス	30位	田中正人、白戸太郎、田島健司、宮内佐季子	
	クロスアドベンチャー	アメリカ	12位	田中正人、白戸太郎、石川弘樹、宮内佐季子	

開催年	大会名	開催地	リザルト	選手	アシスタント
2000年	クロスアドベンチャー	スカンジナビア	24位	田中正人、白戸太郎、石川弘樹、宮内佐季子	
	クロスアドベンチャー	イタリア	11位	田中正人、高畑将之、石川弘樹、宮内佐季子	
2001年	マイルドセブン・アウトドア・クエスト	中国雲南省	14位	白戸太郎、石川弘樹、大内直樹、宮崎康子	
	エコ・チャレンジ	ニュージーランド	11位	田中正人、佐藤佳幸、高畑将之、谷口けい	
2002年	マイルドセブン・アウトドア・クエスト	ボルネオ	16位	田中正人、白戸太郎、佐藤英人、宮崎康子	
2003年	マイルドセブン・アウトドア・クエスト	ボルネオ	12位	田中正人、白戸太郎、駒井研二、宮内佐季子	
2004年	マイルドセブン・アウトドア・クエスト	ボルネオ	12位 (特別賞受賞)	田中正人、横山峰弘、駒井研二、佐藤浩巳	
2005年	アドベンチャーレーシング・ワールドチャンピオンシップ	ニュージーランド	リタイア	田中正人、横山峰弘、駒井研二、佐藤浩巳	北村博一、須藤ナオミ、内田達也
2006年	ブライマル・クエスト	アメリカユタ州	19位	田中正人、横山峰弘、駒井研二、佐藤浩巳	
	The International Mountain Outdoor Sports Challenging	中国杭州	1位	田中正人、横山峰弘、駒井研二、佐藤浩巳	
2007年	Wulong Mountain Quest2007	中国重慶	15位	田中正人、宮内佐季子、田中陽希 (トレーニング中)、山北道智(トレーニング中)	
2008年	Portugal XPD Race	ポルトガル	15位	田中正人、宮内佐季子、田中陽希、山北道智	
2010年	Wenger Patagonian Expedition Race	チリパタゴニア	7位	田中正人、田中陽希、倉田文裕、中澤綾子	
2011年	XPD	オーストラリアタスマニア	20位 (80チーム参戦)	田中正人、田中陽希、倉田文裕、和木香織利	
	Patagonian Expedition Race	チリパタゴニア	5位	田中正人、田中陽希、倉田文裕、和木香織利	
2012年	Patagonian Expedition Race	チリパタゴニア	2位	田中正人、田中陽希、倉田文裕、和木香織利	
2013年	Costa Rica Adventure Race	コスタリカ	DNF	田中正人、田中陽希、山北道智、中村雅美	
	Patagonian Expedition Race	チリパタゴニア	2位	田中正人、田中陽希、山北道智、山口明美	
2015年	ARWC in Pantanal (世界選手権)	ブラジルパンタナル	16位 (33チーム参戦)	田中正人、山北道智、西井万智子、高濱康弘	
2016年	Patagonian Expedition Race	チリパタゴニア	2位	田中正人、田中陽希、山北道智、西井万智子	
	ARWC in Australia (世界選手権)	オーストラリア	23位	田中正人、田中陽希、小野雅弘、西井万智子	



## イーストウインドは 僕の青春だった

〈インタビュー〉

白石康次郎

海洋冒険家。1967年、東京生まれ鎌倉育ち。神奈川県立三崎水産高等学校（現・海洋科学高等学校）在学中に、単独世界一周ヨットレースで優勝した故・多田雄幸氏に弟子入り。1994年、26歳でヨットによる単独無寄港無補給世界一周の史上最年少記録を樹立する。イーストウインドの初期メンバー。

### ファミレスで決めたチーム名

僕が初めてアドベンチャーレースに出場したのは、1995年の第一回『エコ・チャレンジ（アメリカ大会）』でした。プレ大会のような雰囲気があり、セーリングが種目に入っていたんです。「ヨットが扱えて体力のあるメンバーが欲しい」ということで、カッパク

ラブの初代社長である小橋研二さんに誘われました。

ちょうど自分は、初めての単独無寄港無補給世界一周を終えたばかりの頃。テレビ番組でアドベンチャーレースのことを知り、興味を持っていました。このときは、正人は出場していませんでした。

僕はもともと走るのが嫌いなんです。短距離は好きだけけれど、長距離は得意じゃない。でもアドベンチャーレースに出るために山に走りに行きましたし、マウンテンバイクやカヌーなど、ヨット以外の種目もトレーニングしました。

翌1996年に、初めてチームイーストウインドとして『エコ・チャレンジ（カナダ大会）』に出場します。1997年には『レイド・ゴロワーズ（南アフリカ大会）』にもチャレンジしました。

チーム名は当時のメンバーみんなで考えました。いろいろな候補が挙がっていたのですが、なかなかしっくりくるものがなくて決まらなかった。そんなある日、ファミレスで食事をしていたら、「東洋の風を吹かす、なんていいんじゃないか？」というアイデアが出て、「チームイーストウインド」に決まりました。

正人と僕は同年です。彼は当時からとても真つ直ぐで、ひたむきに競技に取り組んでいました。まだ若く誰よりも走力があつたので、ほかのメンバーにストレスを感じるこ



## 本音でぶつかり合った 仲間

〈インタビュー〉  
白戸太朗

1966年、京都生まれ。プロアスリート、スポーツナビゲーター。1991年よりプロ・トライアスリートとして活動。六年連続で世界選手権日本代表、ワールドカップシリーズで世界を転戦。1999年よりイーストウインドに所属。2008年、株式会社ARHEONIAを設立し、トライアスロン普及のためにシヨップ、スクール、イベントなどの事業を展開する。

### チームの潤滑油として

トライアスロンを始めて30年が経ちます。中学からクロスカントリーの競技に取り組んでいて、中央大学に通う頃、オフシーズンのトレーニングとして何かいいものはないかと

探していたときに出会ったのがトライアスロンでした。その後、日本体育大学の大学院に進学し、日本チャンピオンとなって、プロ・トライアスリートとして独立します。

ちょうどその頃、『ボルヴィックトルファイ』という一日で終わるアドベンチャーレースに出場しました。そこに僕より1歳年下の田中正人が出場していたのです。当時の田中はチームメイトがなかなか定まらない様子で、「アドベンチャーレースに向いているから、一緒にやりましょう」と声をかけてきました。でもそのときは「トライアスロンが一段落したら考える」と答えただけだったんです。それから数年が経ちました。

1997年のオフシーズンに、僕は「これからはマルチな活動をして、トライアスロンを広めていきます」と雑誌で宣言したんですね。それを正人がチェックしていて、「そろそろアドベンチャーレースもできるんじゃないか」と再び誘ってきました。サロモンが国内最強チームをつくろうと、アドベンチャーレースに力を入れ始めた頃です。

そして1999年からの三〜四年間、トライアスロンを続けながら、イーストウインドに参加しました。当時、僕は田中の名前を音読みして「でんちゅう」と呼んでいました。フィジカル面では僕のほうが強いところもありましたが、山での立ち居振る舞いや競技に取り組む真摯な姿勢など、彼から学ぶことがたくさんありました。正人は人にも厳しいけれど、自分にも厳しい。レースに向かう姿勢に妥協がないんです。

続きは本書をご購入のうえ、お楽しみください

## 第四章

# 田中陽希

現在地を知り、  
未来の道をつくる